

【書評】

楠 茂樹・楠 美佐子『昭和思想史としての小泉信三——民主と保守の超克』

ミネルヴァ書房，2017年，xiv+368頁

小泉信三は扱いにくい題材である。とくに、慶應義塾においては元塾長であり、著名な経済学者でもあり、また皇室との周知の関係もあり、ということで、批判的なコメントをしにくいという現状が長らく続いていた。今回、若い世代の研究者による小泉論が上梓されたのはまことに慶賀にたえない。

2人の著者についての説明は不要かもしれないが、若干の紹介をさせていただく。楠茂樹氏は、経済法の研究者だが、法と経済、さらには経済思想史、とくにオーストリア学派についても深い知識を有している。著書として『公共調達と競争政策の法的構造』他がある。同書は、入札＝競争の促進という単純な見方にたいして抜本的な見直しを迫るもので、素人である評者も大きな知見を得た。楠美佐子氏は、経済思想史、とくにオーストリア学派の研究者。2人の著作としては、『ハイエク「保守」との訣別』がすでにあり、2人の共著としては2冊目にあたる。

本書は、明治期の小泉信三と題された第1章から、ほぼ時代順に歩を進め、研究者プロパーとしての小泉を扱った第2章を受け、第3章では塾長としての小泉を扱う。そして、第4章は戦後に目を転じ、小泉の共産主義批判を考察の対象とする。後続する諸章の特徴としては、第6章で講和問題についての小泉の言説を正面から扱ったこと、そして第7章でハイエクとの関係を扱ったことが指摘される。

本書の貢献としては、前記のような研究状況のなかで、果敢に小泉信三という扱いにくい対象に挑んだことである。これは特筆すべ

き点である。いままで、評者も含めて、小泉についての部分的な研究はなされてきたし、これからも続けられることになろうが、全体像を提示しようとした研究は欠いていた。著者はたまたま2人とも慶應義塾の関係者だが、新しい世代による新しい小泉論が書かれたことは喜ばしい。以下、同意できる点はさておき、評者が感じた問題点を順次述べて、読者の反応や著者のリジョインダを待ちたい。

まずは、福澤と小泉との関係、そして小泉その人の戦中の言説についての著者に理解にかんしてコメントする。

小泉と比較の対象とされている福澤については、つぎのような所感を持った。福澤の再発見が小泉の言説にとって重大な意味を持つことを明らかにしたのは本書の大きな貢献である。その上で申し上げることだが、福澤の「瘦せ我慢の説」と、小泉のほとんど好戦的と解釈されてもしかたがない言説との距離は残されたままだという印象を持った。小泉のような「瘦せ我慢の説」の解釈はたしかにそこで福澤が述べていることの一面を鋭くついたものではあるが、一面に過ぎない。議論の中心は、あくまで旧幕臣たることの我慢、仕官すべきかどうかについての我慢にあるのではないか。また、小泉がゾンバルトを引いていることから想像がつくように、小泉の基調の1つが共同体主義である。このような観点が福澤に皆無でないことは小泉が力説するとおりだが、それが強調されればされるほど、師弟の懸隔はかえってはっきりしてしまうのである。多くの福澤の読み手がそうだともし

えるが、小泉は福澤の所説の一部を上手に使っている。あるいは、しばしばそういわれるように、また著者たちも言及しているように、これは小泉の真意であるというよりは、戦中は、当局から慶應義塾や福澤を守るために意図的に福澤の共同体主義的側面を強調したのか(105)。

さらに、戦中の小泉の言説にたいする著者の評価には疑義がある。小泉理解にとってはいわば本丸であるだけに、コメントは避けられない。102-03頁では小泉擁護が展開されているが、評者のみるところ、その論理構造は明確なものではない。評者に理解できるのは、小泉が福澤の「瘦せ我慢の説」を利用しており、またさらにそれにさかのぼって学生時代には若書きともいえる日本人論をものしているという事実である。小泉の見解の変化は「『変節』ではなく、環境の変化に応じた『適応』だった」(103)と言われれば反論は難しいが、これだけでは、あとに紹介されている鶴見俊輔の反論に対抗するのは難しいのではないか。小泉研究の戦略としては、戦中の言説をそのまま認めるというやり方もありうるが、著者の立場は書き手として主観的にはともかくも——戦後の標準的な政治イデオロギー、つまりは丸山や鶴見の立場といってもよいが——、そのようなものをあくまで前提にしている感じを免れ得ない。我が国は日本人単一民族という俗説に小泉が関与しているのは残念だが、それも含めて、小泉にたいする批判は批判として述べておく必要はあるだろう。著者らは新しい世代の研究者だが、どこかに小泉にたいする評価という点において、不自由さを感じた。

福澤とならんで比較の対象とされているのが、ハイエクである。ハイエクとの対比で、

小泉は福祉国家の側に事実上よっているとされているが、これは正しいのだろうか。つとにハイエクその人についても、本学会太子堂会員などによって強調されているように、一定の政府による支援は認められていて、ハイエクがとうてい原理主義的なりバタリアンとはいえないことはよく知られている。そのようなハイエク像を前提にする限り、ハイエクと小泉の距離付けはさらに正確に行う必要がある。また、小泉自身の政策的立場についても疑問がある。かつて評者自身が述べたように、小泉は明らかに最低賃金の制定については疑問を呈している。これはどのように解したらよいのだろうか。経済理論という領域に限定すると、評者には小泉は自由主義的政策論の枠内にとどまったように思われる。ケインズ経済学の積極的な摂取もない。経済理論家としての立場と一般的なあるいは政策的な言説において、差異があったのだろうか。さらなる御説明をいただきたく思う点である。

細かいことではあるが、行論の過程で、前出の小泉からの引用が再び現れるのは、議論の効率的な展開という観点からはいかがであろうか。同じ論文や書籍のなかで、再度の引用は不可というわけではないが、その場合は新しい観点が必要である。

以上、さまざまな観点から批判的コメントを記してきたが、これらは著者だけではなく評者も含めてさまざまな研究者が考えていくべき問題である。新しい小泉研究としての本書の価値は上記のコメントによって減じられることはない。今後の小泉研究は、本書との対峙なしには不可能である。

(池田幸弘：慶應義塾大学)